



本町11人目の教育委員会外国語指導助手  
レベッカ・メイ・カルダーさん  
(カナダ出身・24歳)

「自然がいっぱいで優しい人たち。山田はとつてもいいところですよ」と町の印象を語るレベッカさん。八月末から本町十一人目の教育委員会外国語指導助手として教壇に立っています。「子供たちは少しシャイだけど、いつも笑顔で接してくれます」と、山田での生活をスタートさせました。

出身地は、カナダのオンタリオ州ペテルブルグ市。「たくさん湖や森、丘があつて自然豊かなところは、山田によく似ています。山田湾は地元の湖を小さくした感じで、親しみが持てます」と古里について語ってくれました。

## 異国の歴史や文化学びたい

大学ではコミュニケーション学を専攻。将来は英語の教師を目指します。山田の生徒には、文化の違いはあるけれど、英語がおもしろいというのをぜひ伝えていきたいと話します。

「日本は初めてで、日本語がまだうまく話せませんが、皆さんとの交流を通じて異国の歴史や文化など多くのことを学びたいです」と意欲満々です。

最後に町民の皆さんへ一言をお願いします。「山田の皆さん、よろしく願います」と日本語でしっかりと応えてくれました。

## 山田RCの「やまだの作文」

### いわて文集まつりで最優秀賞



賞状と盾を手にする山田ロータリークラブの大杉繁雄会長(右)と昆常治・新世代奉仕委員長(左)

県教育弘済会主催の「第十八回いわて文集まつり」の一般部で、山田ロータリークラブ(大杉繁雄会長)などが発刊した「やまだの作文第三十一集」が最優秀賞に選ばれました。

同文集まつりの一般部には、県内から十六作品の応募があり、同クラブは、今回初めて応募し同賞に輝きました。

同作文第三十一集は、同クラブが町教育研究協議会国語部会などと共催で、昨年度に発刊したもので、B5判、六十七頁。町内の小中学生から応募のあつた作文の中から入賞した作品を載せたもので、小学生二十九人、

中学生十九人の作文がつづられています。作文のテーマは自由で、身近に感じたことや思ったことなどを素直に文章で表現。どの作文も文章力や描写力、構成が高く評価されました。

同クラブは地域社会への奉仕活動の一環で、昭和四十八年に「交通安全の作文」として第一集を発刊。以来、学校の統廃合やテーマの自由化など幾多の変遷をたどりながら、青少年の健全育成活動として発刊を続けてきました。今回の受賞はその長年にわたる活動が大きく認められたものです。

受賞について会員の皆さんは「作文を通じて子供たちが心豊かに成長することを願ひ、今後活動も続けていきたいです」と決意を新たにしています。